

もくじ 戊辰戦争の風刺画が表す世相 1P 看板の力 3P  
若田家資料②屋敷図 4P



戊辰戦争の風刺画 慶応4(1868)年《大会 狂俳点句》大判錦絵二枚続 右側に徳川方、左側に官軍方を配した風刺画。○数字は次ページ参照。

# 足立史談

第604号

2018年6月15日

足立区立郷土博物館内

足立史談編集局

〒120-0001

東京都足立区大谷田5-20-1

TEL 03-3620-9393

FAX 03-5697-6562

(30-309)

## 戊辰戦争の風刺画が表す世相

郷土博物館

いまから一五〇年前、慶応四（一八六八）年、江戸と周辺は戊辰戦争のただなかにありました。とくに四月四日（今の暦で四月二六日）から、上野戦争（彰義隊の戦い）で徳川方が鎮圧される五月十五日（同、七月四日）の間は、江戸を占領した官軍と江戸庶民の間に緊張感がただよっていました。官軍による支配が始まった頃、江戸の人々の間で流行ったのが錦絵に描かれた風刺画でした。その一つを読み解いてご紹介します。

上の錦絵は表題に「狂俳点句」とあるようにモチーフは俳諧の採点会です。しかし描かれた俳諧師たちは一風変わった衣装の人々です。

■**図柄から** 読み解きのヒントは一覧の通りで文字や家紋、描かれた文字や扇などに描かれた字句から連想できます。各藩を連想させる紋、会津藩の並九曜紋や尾張藩の丸八紋など当時の江戸と近郊の人々にはすぐ連想できる紋や、サの字に竹図で「サタケ」と藩主家（佐

佐）

### 読み解きのヒント1【徳川方】

藩や勢力	図柄や文字
会津藩	藩の紋＝並九曜紋、着物に「アイ」字
庄内藩	藩の紋＝丸に片喰紋
徳川慶喜	一文字つなぎ＝一橋＝慶喜
天璋院?	扇の字句
米沢藩	扇の字句と「米」字の紋
田安徳川家	田の字紋（＝田安）
久保田藩	「サ」に竹図＝藩主佐竹家、藩の紋の日の丸扇
二本松藩	藩主丹羽家の軍紋＝直違紋

竹家）を想像させるように工夫されています。

■**文字を読む** 続いてヒントになるのが上下に記された文字と、俳諧師た

### 読み解きのヒント2【官軍方】

藩や勢力	図柄や文字
有栖川宮?	上部の字句
尾張藩	丸八紋＝尾張藩の略紋
徳川慶喜	一文字つなぎ＝一橋
長州藩	チョウ（蝶＝長州）の図
東山道軍（板垣退助?）	ト字（＝土佐）に土佐桐紋（板垣退助の紋）
薩摩藩	サ字（＝薩摩）に藩の紋＝丸に十字紋
土佐藩	ト字に藩主山内家の土佐柏紋
彦根藩	井の字＝藩主井伊家の意。

俳諧師（各藩・勢力）の持ち物の文字

	藩・勢力	持ち物	表現
徳川方	庄内藩	扇	皆人の 驚くきょうの はれ相撲 勝ちたる腕に 握る強弓
	天璋院	扇	起て見つ 寝て見つ 蚊帳の 広さかな
	米沢藩	扇	植え付けし 杉の葉ぶりも魁や やがてを いまに大木となる
	田安德川家	扇	気に入らぬ 風もあるうに 柳かな
	久保田藩	扇	天が下 照らす 光りの ます鏡 うつり替らぬ 松ぞめでたき
	二本松藩	扇	義 忠孝の 道にはかけし ほととぎす
	(板垣退助?)	色紙	機や命を からむ つたかつら
官軍方	薩摩藩	色紙	名産も つよき煙草の刻み算 車懸かりに 切り返しけり
	土佐藩	短冊	行く鳥や 都の花も 思わるる
	彦根藩	短冊	あしたより東風を うしろの旅寝かな

ちが手にする扇や短冊、色紙に記された文字です。まず上下に記された図中の①から⑥の字は次の通りです。

- ①むさし野に夢野ひびくや揚雲雀
- ②願きりは晴れて煙のたちまちに参義の替わる塩釜のうら
- ③蝶飛や池田乃里も小半道
- ④稲妻や昨日は東今日は西
- ⑤呉ふく店言葉やさしき京仕入もの柔らかにひさぐ羽二重
- ⑥しなやかなものは根強し萩の花

面の左上に座る有栖川宮熾仁親王は官軍の司令官、東征大総督ですが⑤の文字列通り京都生まれを表現しており、江戸の人々がどのように皇族を見ていたのかがうかがえます。

■俳諧師の持ち物から各藩や勢力を表す俳諧師の持ち物―扇や短冊、色紙など―には上掲別表の表現が用いられています。

米沢藩の扇には、藩主上杉家のことをもじり「植え(上)付けし杉のはぶりも」と記しています。当時の評判の表現もあり、庄内藩(米沢酒井家)は強兵で知られ後の奥羽越列藩同盟の戦いでも官軍に勝ち続けた藩で「幕末最強」との異名がありました。「勝ちたる腕に握る強弓」という表現から、いかにも庄内藩を連想させる表現です。

また譜代の名家、井伊家ですが、桜田門外の変のち幕府から冷遇されたことから戊辰戦争では官軍に属しました。譜代なのに、官軍の一翼

を担ったことからか、東風(東国風、徳川家の比喩)をうしろにする(「裏切る」との表現が見えます。

※ ※ ※

戊辰戦争の時代、江戸から東京の人々は、官軍の支配下に入りつつ、言葉や風俗の違いから、田舎侍たちと揶揄したり、官軍の藩兵への暗殺事件も多発していました。

この風刺画のほかにも数多く出版されますが、子供の遊びや、花火遊びなど様々な画題から風刺しています。そこには隠された江戸の人々の心象風景が描かれていました。

【お知らせ】

出張博物館グラフィック展

写真と錦絵で見る江戸から東京

東京一五〇年を記念し郷土博物館では区内四か所で画像パネル等を用いたグラフィック展を開催します。前掲の《大会 狂俳点句》のほか、戊辰戦争の風刺画、社会の諸相をふりかえるミニ展覧会です。郷土博物館では本紙2月号で予告しました、修復された勝海舟筆の扁額などをご覧頂く「幕末明治の名筆展」を開催します。会期、会場は下記一覧の通りです。ぜひご来場ください。

(郷土博物館)

■■■ 出張博物館 東京 150 年記念 グラフィック展 写真と錦絵で見る江戸から東京 ■■■

【会場】	【会期】	【アクセス】
足立区立中央図書館	6/13 (水) ~24 (日)	北千住駅西口から徒歩 15 分
足立区役所 1 階区民ロビー	6/27 (水) ~7/6 (金)	梅島駅から徒歩 12 分
JR 北千住駅 南口コンコース	7/7 (土) ~7/8 (日)	
ギャラクシティ	7/11 (水) ~22 (日)	西新井駅東口から徒歩 3 分

※ 北千住駅は午前 10 時～午後 4 時開場。その他の会場は各施設の開館時間に準じます。

中央図書館・足立区役所・ギャラクシティ会場最終日は午後 4 時で終了します。

■■■ 足立区立郷土博物館 東京 150 年記念 幕末明治の名筆展 ■■■

【会場】	= 郷土博物館企画展示室 会期=6 月 12 日 (火) ~7 月 29 日 (日)
【休館日】	= 月曜日, 6 月 25 日~29 日(くん蒸休館)

※ 開館時間=午前 9 時から午後 5 時 (入館は午後 4 時 30 分まで)。

# 看板の力

荻原 ちとせ



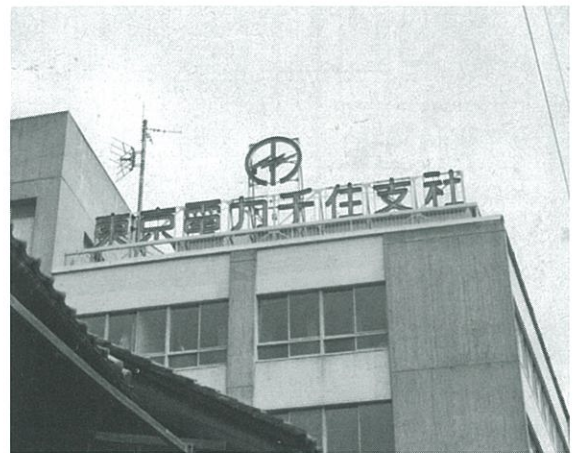
看板は、その店の商う商品や屋号などを目立つようにとりつけ、宣伝、広告、目印とするものである。その歴史は定かではないが、都市が発達し、常設の店が作られるようになり、かつ識字率の高くなった江戸時代中期以降のことと思われる。

現代では、屋外広告物を表示するには、原則として許可が必要であり、自分の敷地内であっても一定の規模を超えるものは、東京都屋外広告物条例施行規則第一条に基づき許可申請が必要であり、有効期間は五年間であるため、期限前には継続申請をする必要がある。

ここで紹介する写真は、区内にあった企業の営業所、工場の屋外広告物を記録するために撮影したもので、いずれも足立区の地域的な特性にゆかりの深い企業である。

## ■東京電力千住支社 屋上看板

東京電力千住支社は、現在の千住消防署の位置にも社屋があったがこれは国道4号沿いの千住中居町八一―六にあった社屋の屋上にあつた看板で、4号線下り側の車線からよく見えるように取り付けられていた。昭和六十二年（一九八七）まで社章とし

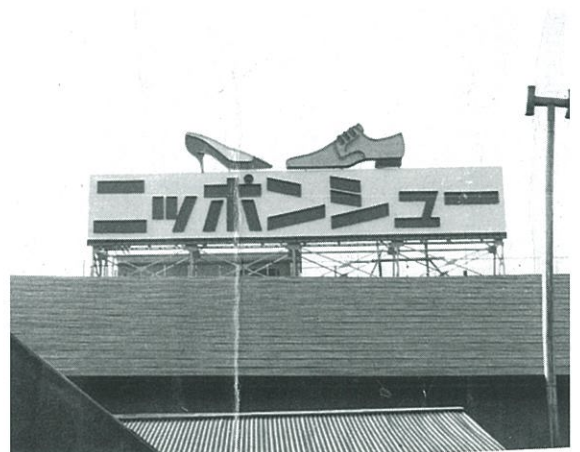


て使用されていた通称カミナリマークが配されている。右の写真は昭和六三年（一九八八）六月の撮影メモがあるため、社章の変更に伴い間もなく取り外されたと想像できる。その後、建物自体は平成一五年前後に取り壊され更地化され、本部ビルは千住消防署になる。

## ■日本製靴株式会社 屋上看板

現在のリーガルコーポレーションの看板で、「ニッポンシユー」という「日本製靴」を表す単語と男性用の靴と女性用の靴が向かい合った形を切り出したものである。日本製靴は明治三六年（一九〇三）に現在の千住橋戸町二番地に移転し本社、工場を設立し、平成二年にリーガルコーポレーションに社名変更している。

この看板は、昭和三七年（一九六



二）には設置されていたようで、昭和六一年（一九八六）に撤去されている。設置から二〇年あまりを経て撤去にはかなり老朽化が進んでいたようである。

男女の靴を切り出した看板デザインは、その靴の履き主達の姿が思い浮かべられるようなロマンチックでお洒落なデザインで、多くの人々の目を惹きつけたことと思われる。

## ■イトーヨーカ堂西新井店 屋上看板

現在は、ザ・プライスとなつている興野一丁目二のイトーヨーカ堂の看板である。右の写真に写るアドバルーン下のバナナの宣伝文に、「開店イトーヨーカ堂」、「田中商店」という文字が見える。西新井店は、合板の製造を行う東京プライウッドという会社の跡地に建つたもので、



昭和四六年（一九七一）ころの開店と思しい。

字体は現在と同じようであるが、現在の「イトーヨーカドー」の表記に対して会社名と同じく「堂」と漢字を使っている。マークは鳥がクローバーを加えているもので、現在のハトのマークの前身である。

## ■看板の文化

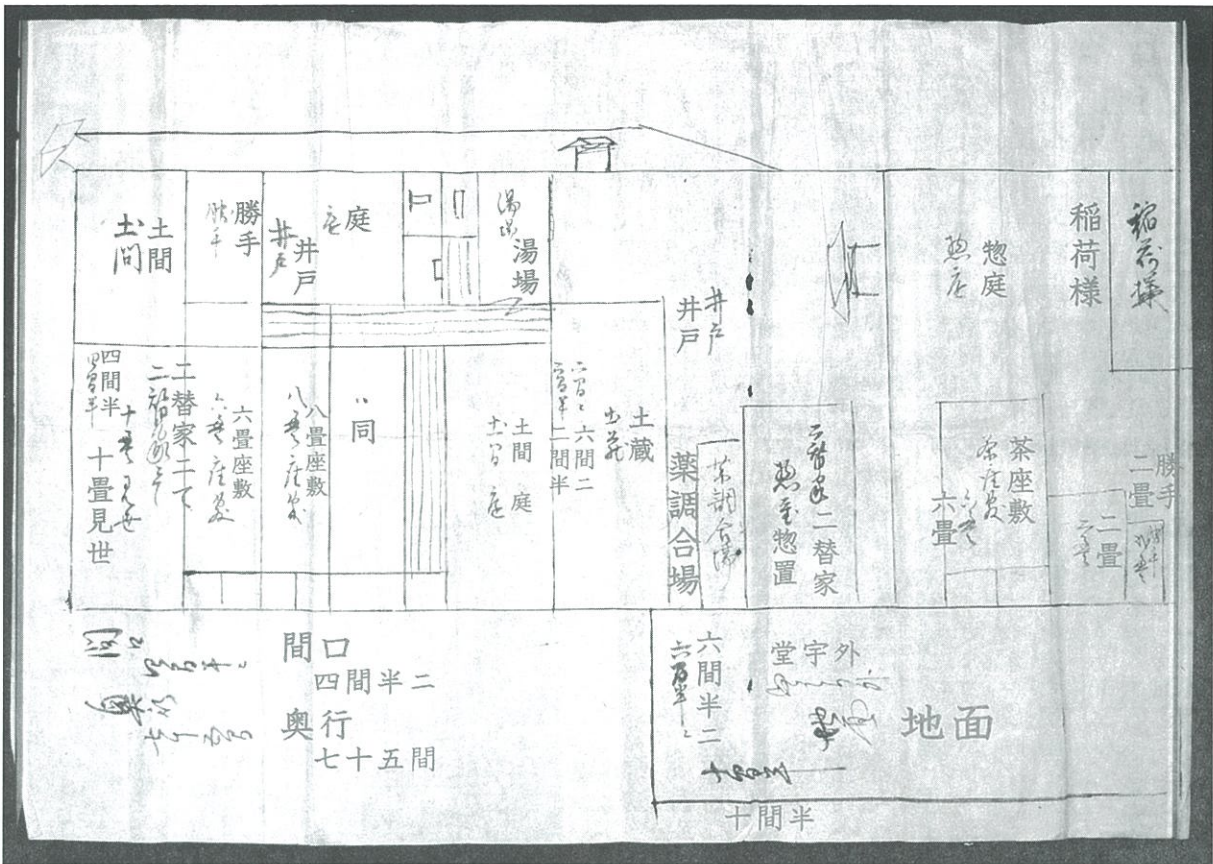
多くの人々に見られるべく設置されている会社看板は文字（ロゴ）やデザインなど、企業のこだわりがあらわれている。当時は、最新であつただろう看板の形態や表現方法にもその時代の特性が映しだされ、また設置している会社の勢いなども表している。看板をマチをデザインする大きな要素として注目していきたい。

（当館学芸員）

若田家資料②

千住掃部宿 畳屋 太右衛門家の屋敷図

多田文夫

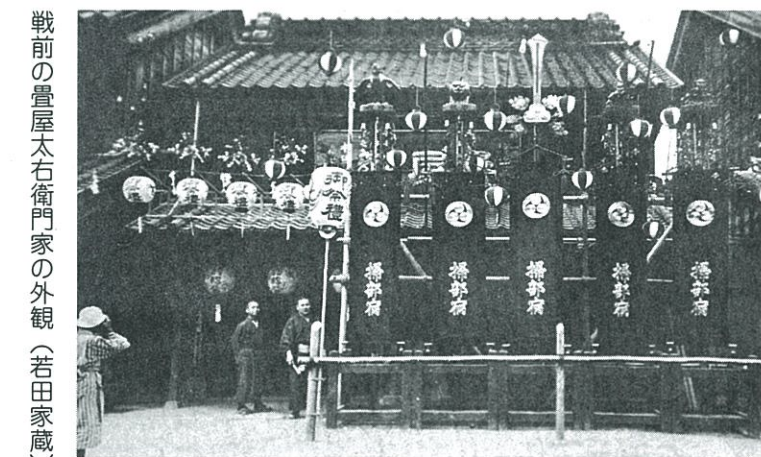


若田家の屋敷図 左側が東(日光道中側)、下が北。部屋や建物の配置を記している。文字から江戸時代から明治初年までに記されたと推定できる。敷地は間口4間半(8.1m強)、奥行75間(13.6m強)という宿場らしい短冊状。(千住伸町・若田家蔵)

若田家資料には畳屋、若田太右衛門家(以下、太右衛門家とする)の間取りを記した絵図面が伝来している。文字から江戸時代後半から明治時代の初期に描かれたと推定できるもので千住宿時代の商家の図面としては貴重であり紹介したい。

若田家によると、この建物は昭和二十(一九四五)年の空襲まで、一部の改装を行いながら用いられた。全体的な構成は近世町屋の形式のうち、江戸や関東の町場でよく見られる商家建築のうち前土間型(間口いっぱいにはドマヤニワを設ける形式)である。

■茶座敷と惣庭 太右衛門家の屋敷で特徴的なのが奥(西側)にある「茶座敷」で、二畳の水屋(勝手)などが併設されている。一般的な茶室は四畳半だが、ここでは六畳で設えられており、茶会のみならず用いられたと思しい。同家には琳派絵師、村越向栄の風炉先屏風が伝来しているが(『千住の琳派』展図録参照)、この建屋で用いられたであろう。また茶座敷の前には、若田神社とも称された屋敷稲荷とともに惣庭があり、おそらく庭屋一如(庭と建物の調和)がはかられていたのだろうかと思像する。芸術を取り込んだ太右衛門家の歴史が想像できる。なお庭は表側、中央部にも見える。



戦前の畳屋太右衛門家の外観(若田家蔵)

業、製薬問屋の根幹をなす「薬調合場」がほぼ中央にある。二階屋(図中では「二替屋」)の物置(同「物置」)に併設されている。評判となった太右衛門薬の製造空間が、屋敷の中央にあったことが判る。

取引の中心になったのは街道側にある十畳の「見世」である。大きな空間だったと思しく、二階家と記している。太右衛門家では、番頭以下、丁稚を抱えていたが、この二階部分には丁稚が起居したという。

—つづく— (当館学芸員)